

令和7年度 山県市総合教育会議（議事録）

1 日時

令和7年11月4日（火）（10：15～12：30）

2 場所

山県市役所3階 大会議室

3 出席者

市長	林 宏優
副市長	久保田 裕司
教育長	服部 和也
企画財政課長	宇留野 公男
教育委員	川田 八重子
教育委員	石井 まなみ
事務局	学校教育課長
	鷲見 亮
生涯学習課長	大西 義彦
	岡山 敏明
図書館長	三島 夏子
	堀田 友邦
生涯学習課係長	大石 章生
	学校教育課主任
学校教育課主幹	柳川 順
	学校教育課主幹
学校教育課課長補佐	横山 直美
	教育委員会
	赤木 亮太

4 第1部（10：25～10：45）

○教育長 服部 和也 アトリエ事業について
地域クラブについて

5 第2部（10：50～12：15）

○講 話：東京大学名誉教授 牧野 篤 氏
テーマ：「地域」を結び、「社会」をつくる「学び」
—子どもたちの「ふるさと」をつくる—

学識経験者 名古屋柳城女子大学准教授 豊田 明子
評価委員 岐阜大学客員教授 早川 三根夫

○質疑応答

6 会議の概要（別添のとおり）

会議進行：学校教育課課長	
1 市長あいさつ	
市長	<ul style="list-style-type: none">・子どもの数が減少している大変な時代となった。・市内の労働力不足を補うために海外の技能実習生を招き入れている。当市では、数年前では約500名だった技能実習生は、今では約800名に増加している。近隣市町村で言うと、美濃加茂市は人口割合で見ると約5～6%だったが、約10%が海外からの技能実習生となっている。・人口減少の影響下で、自治会運営が厳しく「こども会」といった行事等も無くなりつつある。・自身の思いとしては、次世代のこどもたちに様々な面で整った環境を残していきたいと考えている。（これまでに、こども達の生活をサポートする政策を行ってきた。）
2 第1部	
○教育長 服部 和也	アトリエ事業について 地域クラブについて
教育長	<ul style="list-style-type: none">・山県学園構想は統廃合の議論から、どの学校の授業も受けられるという未来型の教育をやろうと、描いていたものがうまく具体化されてきている。スクールワイドP B S（ポジティブ行動支援）を校長先生方が一生懸命取り組んでもらっている。教育ビジョンの中でこれがきちんと動いているのは宮崎と岐阜の山県。・全小中学校、こどもサポートセンター、山県高校が一緒になって教育課程が動いていることに、教育的な価値を見出している。・美山地域でいうと3・4年生が一緒に授業を行い、5・6年生が中学校に行って授業を行う仕組みができている。高富小学校においても近隣小学校のみならず、いろんな学校と行事等を一緒に行っている。・義務教育学校にしなくとも、山県市は担任と専門の先生（T2）で授業が行われている。いわ桜小学校においては、教科担任制や合同授業、異年齢学習といったハイブリット教育を行っている。・伊自良北小学校では児童主体の「銀杏カンパニー」を設立し、一人一役で運営するなど、小規模校の利点を生かした特色ある教育活動を行っている。

教育長	<ul style="list-style-type: none"> 伊自良中学校は岐阜大学とも連携して活動しており、複数校との協働体制を構築している。 教員一人当たりの児童生徒数は、県で13.1人となっているが、山県市は9.2人と、きめ細やかな教育ができている。 これからは地域で子どもが育つ、学べるという環境を整えて行くことが必要。学校がいろんなものを取り入れながら、教育サービスをきちんと提供していく場所にしていくべき。 山県市の就学援助対象者は約10%、部活動未加入者は約25%に上昇しており、進学先は通信制高校が増加している。 山県高校進学が約30%、市外の高校進学が約70%、経済格差のある子どもたちにも対応する教育ビジョンを策定した。 15時以降に子どもたちが教育サービスを受けられる場所として、アフタースクールを構想している。経済格差のある子もいろんな体験ができる。 子ども達の放課後の居場所をつくることから、今年度より放課後児童クラブを教育委員会に所管替えした。放課後の教育サービスをいかに提供していくかが今後の課題。 学校は安全で無料の教育サービスを提供できる拠点として、選択可能な学びの設定と仕組みが生涯学習課中心に動き出している。 <p>「ふるさと山県で育む子育て・教育」を推進。</p>
2 第2部	<p>○講 話：東京大学名誉教授 牧野 篤 氏</p> <p>テーマ：「地域」を結び、「社会」をつくる「学び」 —子どもたちの「ふるさと」をつくる—</p>
牧野氏	<ul style="list-style-type: none"> 中国との交流を目的に、小中学校の40代以下の若手教員を連れて1週間程訪問した。黒板を背景にした授業はなく、ほとんどグループ学習でA I やP B L (プロジェクト型学習) など個別最適化が進んでいる。一斉授業を行っているのは日本とフランスだけ。 島根県益田市との交流から事例紹介。 ふるさと教育やキャリア教育だけでは地元愛が育ちにくく、多世代交流や大人のかたりば活動が子どもの自己肯定感や地元愛の醸成に寄与し、高校生が小学生に自分の人生を語り、その小学生が中学生になると小学生に語るなど引き継がれている。 小学生から高校生までが実行委員会を立ち上げ、地域の竹を利用し竹灯籠を作成するなど、学校外での学びや地域活動を主体的に行うなど、地域連携による多様な学びの機会が拡大している

牧野氏	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢社会を悲観的に捉えるのではなく、ポジティブエイジングや世代間交流を活かした新しい社会像が提案されている。 ・地域に育ててもらう、自分たちが支えてもらうだけでなく、自分たちが地域を支える立場に回りたいと願い始めている。 ・2年前に現行の第4期「教育振興基本計画」策定に加わった。基本コンセプト一つ目は、2040年を見据えて、社会の担い手育成という議論から作り手育成に切り替え。二つ目は、社会に根ざしたwell-beingの向上。社会がwell-being状態で、個人がwell-beingになれるようにしていく議論。 ・社会教育は地域コミュニティや行政と連携し、幅広い基盤、プラットフォームを形成し、人との関わりや、つながりを作り出し、協力し合える関係としての土壌を耕しておくこと。 ・コミュニティや家族の中で育まれる「Compassion（思いやり）」が世代を超えて社会全体の幸福やつながりを生み出す原動力となる。 ・「こども真ん中社会」などの序列的発想よりも、全員が主役となり混ざり合う社会が望ましい。 ・これからの中学校に求められることは、「よきこと」を実践し、つなぎ、「よき存在」になることで「ふるさと」をつくる、次世代を育成する「学び」の拠点となること。 ・大人が「よきこと」をつなぎ、「よき存在」となり、「よき社会」をつくる「学び」の拠点となること。 ・well-being実現の拠点となること。
3 質疑応答・感想など	
石井教育委員	<ul style="list-style-type: none"> ・Compassionが基本となって「よき存在」となることとあるが、地域交流は時には個人間の結び付きを強くするが、時には関係性における分断を生む可能性をはらんでいる。その考え方についてどう思うか。
牧野氏	<ul style="list-style-type: none"> ・個人と社会を分けて考えていたが、1人の良い働きかけが地域社会に伝播していき地域社会が循環していく。社会貢献を行おうとする姿勢は、ひいては個人のwell-beingは「よき存在」として幸福感に繋がる。
副市長	<ul style="list-style-type: none"> ・自身は、高富小学校PTA会長を行っていたことがあるが、その頃は多世代の交流が大切だと感じており、実際に交流を通じて地域との繋がりを強めていた。ただ、今振り返ると、その環境が維持できておらず、地域でこどもを支えようといった地域性を醸成できていないように感じる。今後は何か一つでも生かしていく

副市長	い。ただ、こどもファーストの話をしているが、高齢者の扱いに疑問が生じる。この考え方はいかがだろうか。
牧野氏	<ul style="list-style-type: none"> どちらか優先という考え方ではなく、子どもから大人まで皆が地域社会を創っていくという自覚を持っていくことが大切である。 また、こども自身も地域社会を担う主役であるという意識改革が必要である。
副市長	<ul style="list-style-type: none"> こども家庭庁の政策のなかに、「こどもまんなか」という言葉があり耳にするようになった。しかし、こどもをまんなかと捉えるとそれ以外を排除するとも考えられ、行政として差別的な言葉であると考えている。先生のお考えは。
牧野氏	<ul style="list-style-type: none"> 真ん中と端と捉えることもできるが、こどもを中心としてあらゆる世代もまた主役として関わり合っていこうというメッセージとすることもできるのでは。
早川評価委員	<ul style="list-style-type: none"> ふるさと教育において、大人が自分の人生を語る。しかも、成功体験ではなく失敗体験を語るということはとても興味深い。 人は失敗を恐れるが、人は失敗を重ねて成長していく。世代間を超えた交流は地域社会にとって重要である。 こどもは相談したいことがあっても教員に気を遣い相談できないということ。加えて、教員以外でも身近な大人に話を聞いてほしかい。身近な大人に悩み等を打ち明ける事ができる地域環境が重要である。 地域とこどもたちとのつながりはとても重要であると考える。地域を含めたみんなで子どもが育っていくという考え方がまさに山県学園構想であり、山県学園構想が、地域活性化や大人の健康に寄与するとなると益々楽しみである。

(12:30 閉会)